

鹿児島大学水産学部における構成員（個人）点検・評価に関する外部評価

1. 実施経過と実施手順について

1.1 妥当性

社会に対して大学が健全に機能していることの説明責任を果たす上で、できるだけ客観的に大学の活動の現状を点検・評価する仕組みを設けることは重要なことであり、その実施に向けて、学部長のリーダーシップのもとで着実に検討が進められてきた点を高く評価する。

1.2 効率性

このような問題については、多少の効率を犠牲にしても構成員の共通理解と全面的な協力を得ることが必要不可欠であり、その意味で試行に至るまでに相当の時間を要した事情は理解できる。16 年度の点検の試行、16—17 年度の評価の試行を受けてさらに微調整をはかりながら、本格的な運用につなげていただきたい。おそらく、その運用の過程で手順や評価内容など少しずつ軌道修正していくことになるのではないかと考える。

1.3 効果

大学教員の流動性を高めるために、教員組織の再編に連動して若手教員への任期制の適用など定期的な審査の仕組みが導入される傾向が強まっている中で、大学の部局の特性をできる限り生かしながら、社会に対して説明可能な任期制に代わる自律的な点検・評価の仕組みを用意することは大きな意義があると考えられる。

1.4 達成度

点検・評価の基礎になるデータを全員が同じフォーマットで提供できるようになった段階で、目的の半分は達成されたと見ることもできる。それほどそこに至る過程は簡単ではないように思う。いくつかの試行を経て本格的に運用される中で、さらに妥当性の高いものにしていく努力を続けることが必要だろう。

1.5 自立発展性

この点検・評価の手順を経て、構成員のそれぞれが自分の活動の現状を客観的に見直す機会を与えることができれば、点検・評価の導入は成功といえるだろう。

学部のレベルでは、個人から入力されるデータの全体的な分布やその年々の変化を点検・評価委員会などで的確に分析し、現状の特性、将来めざすべき方向などを検討することによって、発展性につなげていくことができるかもしれない。

1.6 その他（自由記述）

難しい作業に取り組んでおられることに敬意を表したい。このようなシステムの立ち上げについてはその労力負担が特定の部分にかかることは仕方がないが、ある程度軌道に乗れば、個人情報漏洩防止に十分注意をしながら、作業の進め方をさらに工夫することが必要だろう。

余計なことかもしれないが、評価に必要なデータ・情報をこの構成員評価だけのために入力するのは結構大変なので、できれば大学全体の評価の準備を兼ねられるように、そちらの動きとも連携しながら進めることが望ましい。

2. 点検評価の内容について（点検項目、重み付け、集計法などを含む）

2.1 妥当性

全体的にうまく設計されているように思う。相対評価にするか、絶対評価にするかは議論の分かれるところであり、相対評価にも利点があることは理解できる。基本となるデータの散布の状況などを試行段階で十分チェックし、できるだけ適切な基準点を設定することが必要であろう。また、平均点として採用するレベルが学部としてこの程度は必要であると判断されるレベルとどのような関係にあるのかを見ておくことは重要であるように思う。

練習船の教員については職務上の特質から見ても、特別領域で評価する方法をとらざるを得ないと考える。陸上教員に対する評価との整合性については、実際に運用しながら不具合がないかどうかを見ていくことが必要であろう。

助手の場合に、社会貢献、国際貢献・交流、管理・運営領域で評価が低い場合に、評価を機械的に修正して一律に「3」とする方法は、主旨は理解できるが、適切といえるかどうか少し疑問である。最初からその点は評価には加えず（あるいは参考データとして取り扱い、4以上については明示する？）、総合点が必要な場合には、教育・研究などに重みを付けて評価するなどの対応もできるかもしれない。

2.2 効率性

とくに問題はないが、最終評価を得るまでの過程や計算方法が少し複雑すぎるように感じる。試行段階はある程度仕方ないが、できるだけ簡明に説明可能な形にしておく方が良いのではないか。

2.3 効果

総合評価をすることを目的としないという点は、4つの評価領域を同等に重要と見ていること、構成員として少なくともどれかに秀でた人材を求めることを、メッセージとして発信しているようで興味深い。項目の取り方や重み付け、集計方法に、できるだけ学部の将来に向けた方針や考え方を反映させることはきわめて重要である。

2.4 達成度

点検・評価の内容については、当初の目的とするところは達成されているように思う。

2.5 自立発展性

上記の「効果」欄に記した点と関連するが、点検・評価の内容は学部の将来に向けた基本姿勢や基本理念と密接に連動するものであり、その前提に立てば、このような点検・評価を継続することは学部の自立（かつ自律）的な発展につながるものと考えられる。

2.6 その他（自由記述）

同じ水産学部で共通する問題をかかえる者として、点検・評価に取り組む姿勢、その評価の内容には参考にすべき点が多くありました。

上記の記載内容について、鹿児島大学水産学部における構成員（個人）点検・評価の目的に従い、必要な場合、同学部または同大学内外に対して公表されることに同意します。

氏名：

印